

ロイコチトゾン病について

畜産課 石井敏雄

1、ロイコチトゾン病とは

ロイコチトゾン病とは住血原虫による鶏の伝染病で、我が国では昭和29年8月に兵庫県で家畜衛生試験場秋葉博士が発見し、その後北海道を除く全国に伝播し、多数羽養鶏に伴い年々その発生は多くなり、被害もまた大きくなりつつある。岡山県下でも昨年は6月中旬より各地に発生をみているが、本年は5月22日県南部に初発をみている。

2、感染の特性

この病気には中間宿主としてニワトリヌカ蚊が存在しなければ感染しない。ニワトリヌカ蚊は県南部では4月11日にすでに採取されている。発生当初は雄が多く雌が少なく特に吸血したものは少なかった。

また再感染及び再発の可能性は今のところ確認されていない。

3、発生地帯と発生時期

その年の気象条件、地域、環境にも影響されるが、中間宿主であるニワトリヌカ蚊の分布と、ロイコチトゾン病発生時期とに密接な関係を持つ。ニワトリヌカ蚊の棲息しない北海道には本病の発生はなく、発生時期もその大部分は6月中旬より10月下旬に局限される。

多発期は7月8月9月（上旬）であり一昨年は8月上旬、昨年は7月下旬から8月上旬であった。

ニワトリヌカ蚊は体長1mm位の小さな吸血昆虫である。ニワトリの吸血以外に人、馬からも吸血する。ニワトリヌカ蚊の発生源については、現在までのところでは清流のわいているところの周囲の土中、及び水田の周囲の土中といわれているが、未だ不明確な点が残されている。ニワトリヌカ蚊も暖地においては成虫越冬することも考えられ、寒冷地では卵から成虫になったものが、地中で越冬するのではないかと考えられている。

ニワトリヌカ蚊の発生状況を調査するために、ライト、トップを午後5時より10時まで用いてヌカ蚊を採取し、クロロホルム処理後、雄雌別、吸血、未

吸血などの区分を行い、季節的、時間的な消長を調べ、同時に血液検査、産卵状況もしらべ本病による影響調査をしている。

ニワトリヌカ蚊の生態については調査したところでは、夜間雌のみが鶏の羽毛の中に侵入して皮膚から吸血するのであるが、一般に昼間は姿を見せない。ニワトリヌカ蚊はどのようにして鶏舎に入ってくるかということ、日没時頃群をなして飛来するのである。

雌のニワトリヌカ蚊は夜間のうちに充分吸血して腹がグミのように真赤になり、大きさも吸血前の5~6倍となり、日の出の頃になると鶏舎の軒先から飛びさり、雄とともに何れかへ飛び去る。ヌカ蚊の飛翔高度測定では20m以上高いところでは採取できなかった。

4、症状

鶏の月令、感染時期、場所、ニワトリヌカ蚊の数、注入されたスポロゾイト（原虫の発育途上の一形態である孢子小体）の数によりきわめて激しいものから、殆んどきづかないものまで非常に多様である。

(1) 喀血、失血死を起し、急性で高い死亡率を示す場合、ニワトリヌカ蚊に刺され、スポロゾイトを注入され、鶏の体内でシゴニーが始った初期から中期（10日前後）までは、出血はみられない。然し、生後12日以上たつとシゴントが血管や毛細管の栓そく、圧迫を起し、破たん性ろ性出血のため肉付のよい元気な雛が急に血を吐いたり、肺、腎、脾、肝から、出血をおこして死ぬ。中雛以上になると殆んど出血するものはなく、貧血、緑色便は殆んどみられない。

(2) 貧血、緑色便、衰弱し死亡する場合

(3) 貧血、緑色便、発育の遅れ、産卵の減少又は停止は起すが耐過して恢復する場合

5、解剖所見

(1) 出血

出血は皮下、筋肉、腎臓、胸腺、脾臓、膀胱、肝臓に最も多くみられ針尖大、粟粒大、蚕豆大の隆起した感じの点状出血、筋肉内の線状出血が殆んどで

岡山畜産便り 1962.06

あるが、時には大出血のため腹腔に血液がたまっている場合もある。

(2) 脾腫

中、大雛、成鶏の場合は筋肉内の点状、線状出血が時にみられる程度であり、脾臓は腫脹が最も著明な特徴的病変である。脾腫のあらわれやすい他の疾病としては内臓型白血病、赤芽球性白血病、農薬の中毒などがあげられる。

6、予防、治療

ロイコチトゾン病の発生を防ぐためには、その中間宿主であるニワトリヌカ蚊を駆除することである。

(1) 予防

(イ) ニワトリヌカ蚊の発生時期が6月から10月の間であり、鶏舎内への侵入が夕刻時である。

(ロ) 低毒性の有機燐剤の2,000倍水溶液を鶏舎の壁、天井、床、糞受台などに撒布する。

(ハ) 鶏舎の出入口及び窓に有機燐剤をしませた縄ノレンをたらすこと。

(ニ) 鶏舎外にライトトラップを設けること。

(2) 治療剤又は予防剤

最近発表されたところによると。フラゾリドン製剤(フラゾリドン0.01%含有)を飼料にまぜて与えると予防にある程度の効果があり、治療剤はなお今後にまつことが必要であろう。